

## 南天の花 ～永井隆 心のうた～ によせて

「原子野の土も五年たてば、やさしくなったのか、今では美しい花が咲くようになりました。四季おりおりに咲きつぐ花を友は手折ってきて私のまくらべに飾ってくれます。私はこの花を通して創造主の愛を感じます。来年も生きのびて再びこの花を見るかどうか、おぼつかない身には、散る花を散るにまかせて過ぎるのが惜しまれ、仰向けにねたまま描く不自由さのうちにも下絵がかなりの数になりました。それを信州の加藤翁が木版にして下さったのがこの画帖です。長崎市浦上 永井隆」 《版画 原子野の花》より

「承諾を得て、先生の作品を版画にしたのが始めとなり、先生から種々の作品を寄せられました。ただ先生のお慰めにと、先生の作品に全力を尽くして精進致し、出来るのをお待ち下さる病床へ一刻も早くお届けするのが私の全てでありました。」 加藤大道《版画 狂随想 永井隆先生と私》より

永井隆(1908～1951年)と加藤大道(1896～1965年)ふたりの友情の結晶である版画「原子野の花」は、北アルプス上高地の麓の小さなカフェギャラリーに、今も静かに展示されています。

2017年、信州の春遅き桜の頃、「原子野の花」の版画たちに見守られながら、松本市の「カフェプレイエル&ギャラリーやましろ 加藤大道美術館」で《南天の花～永井隆 心のうた～》のレコーディングがおこなわれました。

渡辺しおりさんが、はじめて「南天の花」を歌われたのは、2013年12月、カフェプレイエルでのサロンコンサートでした。廃版となった楽譜を探し求め、長崎市永井隆記念館所蔵の楽譜の写しを、お孫さんである永井徳三郎館長さんに提供して戴いた賜物でした。以来、しおりさんの心の歌となり、そして迎えた2015年戦後70年。奇しくも山田耕筰歿後50年にあたる記念のコンサートで、永井博士のご葬儀以来歌われることがなかったであろう「白薔薇の」を世に問うことにしたのです。探しあてた、永井隆辞世句に山田耕筰が作曲献呈した未発表の楽譜です。作曲家中山博之さんの編曲とピアノ伴奏で、66年の歳月を越えて初めて甦った歌声は、聴く者35名の心に深く深く沁みしました。

「まだ描かねばなりません弱りがひどく、手も動かなくなりそうにして・・・」

1950年11月2日 加藤大道宛 永井隆直筆最後の手紙より

「いつもいつも私のためにお祈りくださりまして感謝しております。」

1951年4月19日 加藤大道宛 永井隆代筆最後の手紙(5月1日帰天)

永井博士の描く南天も白薔薇も、いずれ加藤大道の手で版画になったことでしょう。けれど、珠玉の歌曲として残ったことを幸いに思います。焼け跡に生きていた南天は、今青々と如己堂に茂り、白薔薇は永井夫人の緑様の化身となって咲いています。「白薔薇の」を音源に残したい! 「南天の花」と共に多くの方に聴いて頂きたい! 歌い継いで頂きたい! しおりさんの願いから誕生したCDです。このたびは中山博之さんが好んで弾かれた古えのピアノ、プレイエルと、磯野正明さんの瑞々しく味わい深いチェロで新しい命が吹き込まれました。また中山博之作曲「永井隆の短歌による五つの歌」船出のCDでもあります。

ここに至る道を振り返る時、幾多の人と時と場所と、永井隆博士の見えざる御意思があったように思えてなりません。“詩と音楽と絵”を通して、隣人愛と核兵器廃絶、無条件の平和、永井隆博士の御心を感じていただければ幸いです。

カフェプレイエル&ギャラリーやましろ 加藤大道美術館 古畑博子